

岡崎の蚕糸業

田口百三と三龍社製糸工場

■ 「当代稀にみる達見の士」－田口百三



田口百三 写真:(株)三龍社

田口百三は、中津川で製糸業を営む勝野吉兵衛の四男として1868(明治元年)7月に出生。1897(明治30)年6月、百三29歳の時、合資会社三龍社を現在の岡崎市上六名町に創設する。工場敷地面積約8,700坪、建物1,333坪、器械製糸162釜、従業員264名の創業当初から大工場として出発。その立地では、岡崎地域の将来性を見込んだ先見性から「当代稀にみる達見の士」とも評された。その後、経営の拡大と設備近代化を進め、最盛期の昭和初期には運転釜数1,500釜、従業員2,500名の愛知県下最大規模の製糸工場となる。

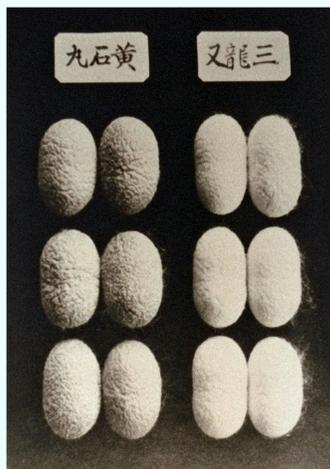
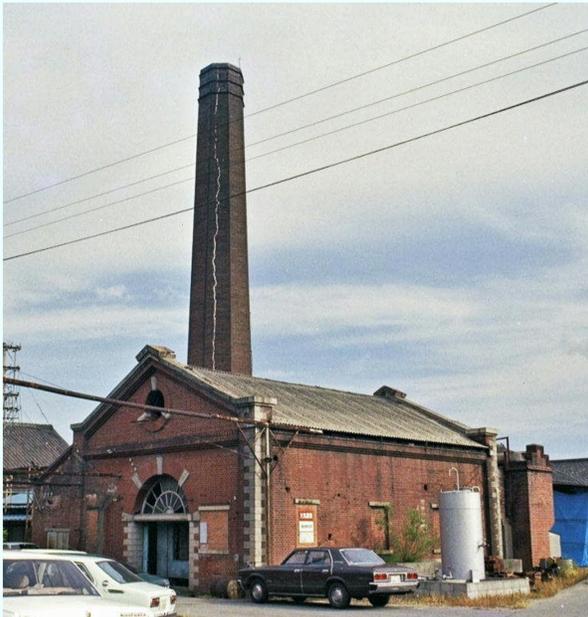
■ 優良蚕種と養蚕教育で貢献

三龍社の製糸工場としての卓越性は、設備近代化だけでなく、原料繭の品種改良研究を独自に行ったことである。経糸用優等糸エキストラ格製造のため、1903(明治36)年に新品種「黄石丸」(黄繭種)、1904年には「三龍又」(白繭種)を創出。この二品種は主要輸出先の米国で高評価を受け、国内でも一大革命と評され、大正年間まで十数年間全国に普及した。

また創業翌年の1898年に養蚕研究所を併設して農家の子弟を教育。1912(明治45)年には三龍社養蚕講習所と改称し、500名余の卒業生を送り出し、養蚕農家の育成にも努めた。

■ 赤れんがの近代的工場

三龍社は近代的な大規模製糸工場として君臨したが、1984(昭和59)年8月に製糸部門を閉鎖して88年の歴史に幕を閉じた(戦後起業の機械部門が操業継続)。その近代化を象徴する、赤れんがの美しい工場でもあった。創業時建築のボイラ室、1916(大正5)年築の高さ33mの煙突、140坪の繭乾燥場



(左)「黄石丸」と「三龍又」
(上)三龍社養蚕講習所と桑園
写真:(株)三龍社



大正初期の三龍社の繰糸風景 写真:(株)三龍社



赤れんがのボイラ室、煙突、繰糸工場 (写真:1990年天野撮影)

や選繭場、煮繭場、繰糸工場、糸倉、れんが塀など、明治、大正期建築の赤れんが造が立ち並ぶ、岡崎では異彩を放つ空間であった。1992年にすべて解体され、今は写真で見るとしか